

2015年7月31日（金）4校目

上演9

長野県 松川高等学校

「べいべー」

第39回全国高等学校総合文化祭
第61回全国高等学校演劇大会

講評速報

生徒講評委員会 担当委員

藤川 彩夏（京都府立東宇治高等学校）

池藤 美波（広島県立福山誠之館高等学校）

山内 愛美（和歌山県立桐蔭高等学校）

大人顔負けの理解力や判断力を示す新生児たちがパワフルに活躍するという奇抜な設定の中に、「生きる」という大きなテーマを描き出している物語であった。

4つのベッドが置かれた新生児室では一見平和な風景が繰り広げられていたが、看護師の手違いで男の子の「たかし」と女の子の「もも」が取り違えられてしまう。そのことに気がつかない親を、赤ん坊たちが痛烈に批判する。この劇では、赤ちゃんたちはまるで大人のように自分の悩みや思いを語り出し、私達が気がつかない社会の矛盾や問題点を明らかにしていくのである。

赤ちゃんの衣装がとてもよくできていた。服の下に、紙おむつはもちろん、男の子には象のマーク、女の子にはハートのマークをつけるなど斬新な工夫があり、タイミングのよいメロディも相まって笑いを誘っていた。あそこまで徹底した衣装で何度も通し稽古をしたらどうなるかを想像すると、同じ高校生として本当に頭が下がる。また、小道具も効果的に使われており、たとえばタバコなどもしっかり作られていて劇を盛り上げていた。

舞台の中央に吊られた大きな球体とその下の小さな球体は、とても印象的だった。大きい方が卵子、小さい方が精子をかたどったものだという意見が出た。ラストシーンでその球体に胎児の絵が投影されたときには思わず息をのんだ。装置がこの劇のテーマである「生命の誕生」をうまく表していたと思う。

また赤ちゃんが寝ているベッドは、腰の部分が深く作られていて、座ると体が小さく見えるように工夫されていた。

演技についても、「けんた」に求婚されたときの赤ちゃんたちの、少しずつずれて動くところはきれいにそろっていて客席から見やすく、感心させられた。頭を手で直す動作には、首が据わっていない赤ちゃんだからこその細かい工夫が見えた。

性同一性障害や育児放棄などの問題が笑いを交えて表現されていた。「親を選ぶ権利はない」という台詞があったが、赤ちゃんは無力で泣きわめくことしかできない。それでも前向きに生きていこうとする姿には希望が感じられたとする意見もでた。自分が変わろうとすれば人生は変えることができるのであり、それが「生きる」ということなのではないだろうか。また、自分たちが親になったときに、自分が行ったことが我が子にどんな影響を与えていくのかということをもっとしっかりと考える必要があるという意見もあった。

深刻な中にも笑えるドラマの中で、私達こそが立派な大人にならなければならない、そんな勇気をもたらしたような気持ちにさせられる劇だった。

